

## 『今昔物語集』のカナ感動喚体句について

—『源氏物語』のカナ感動喚体句との比較—

近 藤 要 司

**要旨** 本論文では、終助詞カナを用いた感動喚体句について扱う。『源氏物語』のカナ感動喚体句と『今昔物語集』のカナ感動喚体句を比較すると、今昔では、人を意味する名詞を骨子体言とする用例が大きく増えており、その名詞が聞き手を指す用例も目立つようになる。これは、カナ感動喚体句が遭遇した事態に対する話者の情意を確認し語るという表現性から、遭遇した事態そのものを語るものに変化したことを物語るものである。

## 一 はじめに カナ感動喚体句について

## 一の 一 山田孝雄の感動喚体の定義

「喚体句」という概念は、山田孝雄博士が創出したものである。我々が通常「文」と呼ぶものは、山田においては「句」と呼ばれるが、それは「統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ」（『日本文法学概論』九一七頁）とされる。「統覚作用」とは、事態了解における精神作用のことである。山田における「句」とは、このように精神作用を通して形成された思想が言語として形を取ったものとして定義されるのである。

句は、その発表形式によって二つに分けられる。これが述体の句と喚体の句である。述体の句とは、主語と述語

の対立と統一が句の根幹をなすものであり、「花が咲いた。」のような我々が通常思い描く「文」というものに近い。一方、喚体の句とは、古代語の「美しき花かも」のような類の文であり、山田博士の定義によれば「常に体言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心点として、構成せらるるものなり。これはその直感的・一元性の発表にして、感情的の発表形式をとることに於いて、述体の句の理性的・二元性の発表たるものと性質と構造との二面に於いて根本的に違ふものとして対立するものなり。」（『日本文法学概論』九三六頁）というものである。この喚体句はさらに先の「美しき花かも」のような感動喚体句と「老いず死なずの薬もが」のような希望喚体句に二分される。本稿で扱うのは、古代語で中古以後多く用いられる終助詞カナを文末に持つ感動喚体句（以下「カナ感動喚体句」と呼ぶ）である。山田の言う「この思想の中心点となる体言」について、本論では以下「骨子体言」と呼ぶことにする。

## 一の二 『源氏物語』のカナ感動喚体句と『今昔物語集』のカナ感動喚体句の比較

一一世紀初頭に成立した『源氏物語』の日本語と一二世紀初頭に成立した『今昔物語集』の日本語とは、それぞれが属する文化背景の違いのみならず、時代的な変遷も大きい。たとえば、前稿近藤（二〇二二）で扱った活用語に下接する終助詞カナの用例については、『源氏物語』に三五〇例以上あった用例が、ほぼ同じ言語量を有する『今昔物語集』では五九例と激減しており、その詠嘆文としての内実も、話者の内面の情動そのものを述べることを主眼とするものから、遭遇した出来事を描くことを主眼とする表現に変化していた。

今回はこの近藤（二〇二二）に引き続き、終助詞カナを用いたカナ感動喚体句を扱う。今回扱うのは、以下のような用例である。（用例の後には、用例の所在と『新編日本古典文学全集』の巻数と頁数を示してある）

- (1) いとあはれに悲しく心深きことかなと涙をさへなむ落としはべりし。(帚木・新編二〇、六六頁)
- (2) 「此ノ寺ニモ而ル夢見テ語ル人有リツ。哀ナル事カナ」トテ泣々ク貴ブ。(卷二二第二四・新編三五、二二六頁)

この形式では、『源氏物語』三〇九例、『今昔物語集』二〇八例ある。先に述べた活用語に下接する終助詞カナとは異なり、『今昔物語集』の段階でもカナ感動喚体句が衰退したとは言えない。事実、さらに後の時代の『宇治拾遺物語』においても、一〇〇例以上用いられているのである。

では、その内実には変化があったのだろうか。これについて本稿では以下の二つの点を中心に比較を行う。

(一) 連体修飾部の形式について

(二) 骨子体言の種類について

そして、「人を意味する名詞」が骨子体言であった場合には、さらに用例の使用状況についても比較を行う。

## 資料について

本稿では、国立国語研究所（二〇〇一）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2021.3、中納言バージョン 2.5.2）<https://cedinjal.ac.jp/ch/>（二〇二二年一月六日確認）を利用した。このコーパスから、『源氏物語』全巻、『今昔物語集』（巻一、二、三、四、五、六、七、九、二〇、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一）の終助詞「かな」の用例をダウンロードした。さらに、個々の用例については、『小学館新編日本古典文学全集』の注などを参照した。『源氏物語』については、他に『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』のデータも利用した。

## 二 『源氏物語』と『今昔物語集』の力ナ喚体句の全体的な比較

### 二の一 連体修飾部のありかた

全体としては連体修飾部のありかたは、源氏と今昔の間にそれほど大きな違いは見られない。

表1の「形容詞主体」というのは、以下のように、「形容詞連体形」、「形容詞に近い語＋あり・なし」、「形容詞語幹＋の」の形式である。<sup>(注1)</sup>なお、ここでの形容詞は形容動詞を含んでいる。

(3) (紫の上をはじめて見た源氏がその髪あたまの美しさに感動する) なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。(若紫・新編二〇、二〇六頁)

(4) (「酒壺に蛇がたくさん入っている」と妻が言うので)「奇異キ事カナ。若シ妻ノ僻目カ」ト「我レ行テ見ム」ト思テ(巻一九第二一・新編三六、五二六頁)

(5) (熱心に求愛する薫を大君があつかいかねて) いとうたてもあるわざかな、何に聞き入れつらむ、と悔しくむつかしけれど(総角・新編二四、二六四頁)

(6) (悪霊のうごめく所に、迷ってはいりこんだ僧に、死んで悪霊になった僧が話しかける)「汝ハ何ニシテ此ノ所ニハ来タルゾ。此ハ人ノ軀カラダク可来キ所ニモ非ズ。希有ノ事カナ」ト。(巻一九第一九・新編三六、五一九頁)

(6)のような「形容詞語幹＋の＋名詞＋かな」は、『源氏物語』には見られなかったが、

表1. 評価情意の在り方

情意評価の在り方	源氏		今昔	
形容詞主体	208	67.1%	143	68.8%
形容詞連用修飾	37	11.9%	14	6.7%
形容語間接修飾	10	3.2%	26	12.5%
動詞主体	55	17.7%	22	10.6%
その他	0	0.0%	3	1.4%
総計	310		208	

『今昔物語集』には、一一例あった。これは、『源氏物語』の時代にはカナ感動喚体句と並んで多用されていた「を  
かしの御髪や」型の喚体句とカナ喚体句が混同されてできた形式であると思われる。

ちなみに、今昔では終助詞やを用いた「をかしの御髪や」型の喚体句は激減しており、『今昔物語集』全体で六  
例しか見つからない。

「形容詞連用修飾」は、骨子体言を直接に修飾しているのは動詞であり、それをさらに情意評価の形容詞が連用  
修飾している例である。

(7) (はつきりしない夕霧の態度に雲居雁が涙をこぼし、それを父親がどうおもうかと考える場面)「あやしく  
心おくれでも進み出でつる涙かな、いかに思いつらん」(梅枝・新編二二、四二六頁)

(8) (大男が三人切り倒されているのを見た人々が太刀さばきをほめて) 門ノ辺ニ、大ナル男三人ヲ幾ク程モ不  
隔切伏タル、極ク仕タル太刀カナ。『互ニ切テ死タルカ』ト思テ吉ク見レバ、同ジ刀ノ仕ヒ様也。(卷二三第

一五・新編三七、二〇三頁)

「形容語間接修飾」というのは、骨子体言を直接修飾している動詞の格成分を情意評価の語が修飾している例で  
ある。

(9) (朝顔の姫君の他人行儀な対応に源氏が不平を漏らす)「今さらに若々しき心地する御簾の前かな。(朝顔・  
新編二一、四七三頁)

(10) (盗人を蹴飛ばしたら見えなくなった)という強力の僧正の言葉を聞いた弟子たちが「可咲キ事ヲモ被仰  
ル物カナ」ト思フカラ(卷二三第二〇・新編三七、二二二頁)

この形式では、形容詞やそれに準ずる語が直接に骨子体言を修飾する形式よりも、話者の情意や評価を表す姿勢が一步後退している。このような用例は源氏より今昔が増加しており、近藤（二〇二二）で報告した「活用語カナ」の述語が動詞中心になっていくことと連動しているように思える。

「動詞主体」としたものは、さらに二つに別れる。一つは情意評価の形容詞は含まないものの、その動詞自体に情意評価の意味がある場合である。

(11) (出会う前の浮舟一行の行列の様子を見て薫が抱いた感想) 田舎びたるものかなと見たまひつつ (宿木・新編二四、四八七頁)

(12) (平茸にあたって死んだ僧が道長から悔やみの品をもらったことを聞いて自分も死んで悔やみの品をもらおうとした僧についての道長の感想) 殿、「物ニ狂フ僧カナ」ト仰セ給ヒテナム、咲ハセ給ヒケル。(巻二八第一七・新編三八、二〇二頁)

このような例は、源氏に四三例（一三・九％）あり、今昔には二二例（一〇・一％）ある。その内訳であるが、源氏は和歌の例が一四例あり、その多くが「(袖) 濡る、涙もよほす、(袖を) 濡らす、(露) かかる、(涙に) くもる、袂にかかる、しおたる」のような「つらくて泣く」という心情を表す動詞単体の形である。散文で動詞単体のものは、五例である。散文の例では、打ち消しの形になった「飽かぬ、知らぬ」や「ベシマジ」が下接したものが多く、状態性の表現になったものが多い。

今昔にも「物思へぬ」「心得ぬ」や「目盲たる」などの状態性のものも多いが、動詞単体で「物に狂ふ」「恥見る」「罪作る」など、骨子体言に当たる人物の直前の動作を表すものが目立つ。

連体修飾部が動詞でかつ情意評価の語を含まない例が源氏には一二例存在する。

- (13) (源氏が愛人花散里のもとに赴く途中で荒れ放題の邸の前を通り過ぎる場面) 柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。(蓬生・新編二一、三四四頁)
- (14) (夕霧が落葉の宮に思いを打ち明けようとする場面) しめやかにて、思ふこともうち出でつべきをりかなと思ひゐたまへるに(霧・新編二三、四〇三頁)

これらの例では、話し手の心中にあるものは情意評価といった感情の動きではなくて、「これはあれか?」や、「いますべきか?」といった認識や意志に関わったものであり、他のカナ感動喚体句とは大きく異なっている。近藤(一九九七)に活用語カナの一部に述体に接近した例があることを示したが、これらの例も「AはBか」という名詞文の疑問文に接近した例であると捉えられる。

今昔には和歌の一例しか無い。

- (15) (能因法師の和歌)<sup>(注2)</sup> トシフレバカハラニ松ハオイニケリ子日シツベキネヤノウヘカナ(巻二四第四六・新編三七、三六〇頁)

源氏の例は、現代語風の疑問のカナに一歩踏み出した例とも考えられるが、今昔ではそのような例が少ない事情はわからない。

このように一部形式的変化があり、また、源氏には情意評価を含まない連体修飾部がやや目立つという違いはあ

るものの、源氏と今昔のカナ感動喚体句の修飾部の傾向はそれほど大きな変化はないと言える。

## 二の二 骨子体言―人物名詞の増加―

二の一に述べたように、カナ感動喚体句の連体修飾部については、源氏と今昔に大きな違いは見られなかった。しかし、骨子体言については大きな違いが見られる。表2. のように、骨子体言が形式名詞であるものが一番多いという点では両者違いはないのだが、その次に多いものが大きく異なっているのである。それぞれを見て行く。

### 形式名詞

表2の「形式名詞」とは「こと、わざ、さま」の類いのことで、源氏のカナ感動喚体句の骨子体言では、「わざ」が五四例、「こと」が三三例、「さま」が一八例、「もの」が一二例、「ありさま」が一例、「ほど」が六例、「をり」が四例、「気色」が三例、「容貌」が三例、「ころ」が二例、「けはひ、ふし」が一例である。

(16) (源氏の夜遊びが重なるのを周囲に人々が嘆いて)「見苦しきわざかな。このごろ例よりも静心なき御忍び歩きのしきる中にも、昨日の御気色のいとなやましう思したりしに」(夕顔・新編二〇、一八一頁)

(17) (夕顔の娘玉鬘の消息を告げられた源氏がその数奇な運命に感銘を受け)、「げに、あはれなりけることかな。年ごろはいづくにか」(玉鬘・新編二二、一二〇頁)

表2. 骨子体言の比較

名詞分類	源氏		今昔	
形式名詞	149	48%	91	43.8%
非物体名詞	108	35%	17	8.2%
具体物名詞	33	11%	15	7.2%
人物名詞	20	6%	84	40.4%
不明	0	0%	1	0.5%
総計	310	100%	208	100%



一方の今昔では、「事（こと）」が五六例、「相」が一例、「態（わざ）」が二例、「形式名詞としての物」が一〇例、「有様、様（さま）」が一例であった。

(18) (現れた蛇を死んだ娘の生まれ変わりと信じた男が)「此ノ蛇ハ、早ウ昔ノ人ノ成リタルニコソ有ケレ。哀ニ悲シキ事カナ」ト思ヘドモ、(巻一三・第四三・新編三五、三九四頁)

(19) (火難水難の末、かろうじて木の枝にとりすがった少年が嘆く)「此ク遥ナル木ヨリ落テ、身ヲ碎テ死ナムト為ル、悲キ態カナ」ト思フ程ニ(巻二六・第三・新編三七、四六七頁)

近藤要司（一九九七）では、カナ感動喚体句について「散文では中心骨子たる体言が事態や場面全体を抽象的に示すものであることが圧倒的に多いのである。」（四一三頁）としたが、このような傾向は今昔にも共通なのである。

### 非物体名詞

「非物体名詞」とは、「なやみ」「あさね」など人の行為を表した名詞や、実在するが目には見えない「心、音、春」などの名詞である。源氏では「契り」が五例、「おぼえ」が二例、「なやみ」が二例、「隔て」が二例、「朝寝」が二例、「用意」が二例、「あつかひ、かざし争ひ、まじらひ、御言、口つき、思ひやり、祝言、色ごのみ、忍び歩き、物語、文書き」が一例あった。さらに「心」が二〇例、「世」が一三例、「所」が七例、「宿世、声」が四例、「音、暮」が三例、「雨そそぎ、春が、朝ぼらけ、夕」が二例あり、「あはひ、わたり、気色、空、隈、今日、秋、丈だち、心くらべども、心ばへ、前、仲らひ、内、日数、年、年月、品、名、夜」が一例ずつあった。二例を示す。

(20) (寝姿のままあれこれ考えている源氏に来訪した頭中将が)「こよなき御朝寝かな。ゆゑあらむかしとこそ思ひたまへらるれ」と言へば(末摘花・新編二〇、二八五頁)

(21) (薫が勾宮を宇治に宇治にまねいたことを後悔して)いとけしからざりける心かなと、かへすがへすぞ悔しき。(宿木・新編二四、三八七頁)

今昔では、この類型は少なくなっている。源氏が一〇八例(三五%)あるのに対して、一七例(八、二%)に留まる。具体的な語は、「歌、ころもがへ、かまへ」が一例、「心」が六例と「上、色、心ばせ、心ばへ、世の中、名、夜、力、」が一例ずつである。用例は、

(22) (鐘を盗んだ賊の計略に気づいた僧や村人たちが)「極カリケル奴原ノ構ヘカナ」トナム々云ヒ<sup>イミシ</sup><sub>ノ</sub><sup>イミシ</sup><sub>リ</sub>。 (巻

二九第一七・新編三八、三四五頁)

(23) (橋から落ちかかった車を踏み留めた牛をほめて)「極キ牛ノ力カナ」トゾ其ノ<sup>イミシ</sup><sub>リ</sub>辺ノ人モ讚ケル。(巻二七第

二七・新編三八、八八頁)

## 具体物名詞

これは具体的に見、手に触れることができるモノが骨子体言である例である。源氏には三三例ある。語の内訳は、「袖」が六例、「身」が五例、「涙」が四例、「文」が三例、「もの(具体物)」が二例、「月、もじ、雨、絵、葛、空、雪、葛、箱、木綿襪、木立、門、御容面」がそれぞれ一例ずつあった。このうち、「袖」六例など一六例は和歌の例である。近藤(一九九七)に述べたように源氏で骨子体言がこのような具体物名詞であるものの多くは和歌の例なのである。

ここでは散文の例をあげる。

(24) (兵部卿の宮が源氏の書いた手紙の内容を気にする)、「内のこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか、深く隠したまふ」と恨みて、いとゆかしと思したり。(梅枝・新編二二、四〇七頁)

(25) (勾宮が中の君のところに来た薫の手紙についた紅葉の蔦を見て)、「をかしき蔦かな」と、ただならすのたまひて、召し寄せて見たまふ。(宿木・新編二四、四六三頁)

今昔のこの類は、比率がかなり源氏よりも落ちていている。具体的な語は、「馬、乗馬」が三例、「月、一物、猿、花、花ざくら、牛、魚、玉、太刀、地、蜘蛛のい(蜘蛛の糸)、<sup>かなまり</sup>鏡が一例ずつである。二例をあげる。

(26) (病気を払う巫女が取り出した玉を家の人が見て)「可咲<sup>オカシゲ</sup>氣ナル玉カナ。此ノ物託ノ女ノ、本ヨリ懷ニ持テ人謀ラムト為ルナメリ」(巻二七第四〇・新編三八、一二三頁)

(27) (雑談の中で満濃池の魚の多さを称えて)「哀レ、満農ノ池ニハ無限ク多カル魚カナ。三尺ノ鯉ナドモ有ラム」ナド語ケルヲ(巻三二第二二・新編三八、五四七頁)

## 人物名詞

これは「人、者、女」のような人を指す名詞、「大臣、君、まうと」のような親族や役職の呼称を含めたものである。このタイプに関しては、源氏が二〇例(六%)に留まっているのに対して、今昔では、八四例(四〇・四%)に上っている。このタイプは源氏と今昔の間に大きな違いがあるのである。

これについては節を改めて論ずることにする。

### 三 骨子体言が人物名詞であるものについて

前節で見たように、源氏と今昔では人物名詞を骨子体言とするもの（以下「人物名詞型」とする）の用例数の比率に大きな違いがあった。

『源氏物語』のカナ感動喚体句の骨子体言の多くが形式名詞であることについて、かつて

体言カナの場合には、情意や評価は決定的に定まっており、むしろ、その対象事態については描写されるべき具体性が備わっていないのである。そこでは、情意評価の核が話者の内部に生じた情意や評価の感情のとりあえずの対象として「仮構」され、具体性を帯びないままに言語化されたのだというべきであろう。（近藤（2019）p.416）

と説明した。しかしながら、『今昔物語集』ではこれとは異なり、骨子体言が人を意味する語であるものが形式名詞に次ぐ用例数に上っているのである。これは『源氏物語』と『今昔物語集』のカナ感動喚体句の違いの端的な表れだと考えられる。

具体的な用例について検討する。源氏では二〇例の用例があり、「人」が一〇例ある以外は、「あま、まうと、橋姫、君、児、主、女、僧都、大臣、姫君」がそれぞれ一例ずつあるだけである。二例を示す。

(28) (頭中将が式部丞に続きを言わせようとして)「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを(帚木・

新編二〇、八六頁)

(29) (女三宮が紫の上にはじめて対面して)「げにいと若く心よげなる人かな」と、幼き御心地にはうちとけたまへり。(「源氏」若菜上・新編二三、九二頁)

一方、今昔では、用例数は八四例(四〇・四%)にのぼり、これは形式名詞を骨子体言とするものに匹敵する用例数比率である。使われた語も表3のように多種類に上る。「奴」と「者」の例を挙げる。

(30) (久米仙人が術で材木を運ぶと請け合ったのを聞いた役人が)「嗚呼ノ事ヲモ云フ奴カナ」ト乍思、「極テ貴カリナム」ト答フ。(卷一一第二四・新編三五、一一五頁)

(31) (陰陽道をきわめた三好清行が妖怪の出る邸宅を手に入れてその邸に泊まり込むと女の格好をした化け物が出て来た)見レバ、鼻鮮ニテ匂ヒ赤シ。口脇ニ四五寸許銀□(欠字)作タル牙咋違タリ。「奇異キ者カナ」ト見ル程ニ、塗籠ニ入テ、戸ヲ閉ヅ。(卷二七第三一・新編三八、九九頁)

## 人物名詞型の使用状況

人物名詞型は用例数比率で際立った違いがあるが、それとともに、使用される状況についても大きな違いがある。人物名詞型について、その発話の状況を見てみる。『源氏物語』の場合には、全用例二〇例のうち、会話が一〇例で心話独話が一〇例である。これは、富岡(二〇一四)による源氏のカナ感動喚体句全体の調査と大きな違いはない。<sup>(注3)</sup>その会話一〇例のうち、下の二例のみが、骨子体言の人を表す名詞が聞き手を指している例である。

表3. 人を意味する言葉

語	用例数	語	用例数
者	21	賢人	1
奴	16	御許	1
人	9	乞丐(かたみ)	1
主	6	児	1
御房	3	善知識	1
僧	3	尊	1
男	3	大徳	1
白者	3	奴原	1
君	2	童	1
女	2	武者	1
盗人	2	者(物)	1
阿闍梨	1	兵	1
翁	1	総計	84

(32) (源氏の催馬楽を模した歌かけに事情を知らぬ人が)「あやしくもさま変へける高麗人かな」と答ふるは、心知らぬにやあらん。(花宴・新編二〇、三六五頁)

(33) (薫、匂宮それぞれの使者が鉢合わせをして、薫の使者が問いたです)「私の人にや艶なる文はさし取らする。けしきあるまうとかな。もの隠しはなぞ」と言ふ。(浮舟・新編二五、一七〇頁)

この二例のうち「花宴」の例は、花の宴に招かれた右大臣家で臘月夜の姿をもとめる源氏が口ずさんだ催馬楽の句に応じた女性の言葉である。「浮舟」の例は、対面した相手の挙措を怪しんで発した言葉である。こちらの例は後で述べる今昔の例と共通点が多い。

一方、今昔全体では会話に用いられたカナ感動喚体句は一二〇例でこれは全体の五七・七%である。源氏と大きな違いは無い。人物名詞型に限ると、五九例(七〇・二%)である。人物名詞型が会話文に多く用いられたことがわかる。さらに、会話に用いられた五九例のうち、人物名詞が話し手の目の前にいる聞き手を指す場合(以下「人物名詞聞き手型」とする)が、三〇例ある。源氏の二例と比べると大きな違いがあるのである。まず二例あげる。

(34) (馬をたたいて急がせる男にむかつて僧が)何デ道々草ノアル食給フヲ妨<sup>ガ</sup>ゲ進テ搔キアフリテハ可行キゾ。  
極メテ慈悲無カリケル尊<sup>ミコト</sup>カナ」ト云テ、音ヲ放テ叫ブ。(卷一九第三・新編三六、四四三頁)

(35) (主が隣家の死者を自分の家から運び出せと言うのを聞いて妻子が非難して)「希有ノ事モ宣ヒケル人カナ。  
極テ穀ヲ断チ世ヲ棄タル聖人也ト云フトモ、此ル事云フ人ヤ有ル。(卷二〇第四四・新編三七、一四七頁)

これらの例では、話し手が聞き手を直接に「慈悲無カリケル尊」「希有ノ事モ宣ヒケル人」と表現しているのである。

## 人物名詞型の連体修飾部

源氏でも今昔でもカナ感動喚体句の典型は、二で見たように「情意評価の形容詞の連体形＋形式名詞」というものであった。今昔の人物名詞型全体を見ても同様に形容詞連体形が八四例中四一例とほぼ半数を占めている。しかし、聞き手を相手とした人物名詞聞き手型の場合には、連体修飾部が形容詞である例は少ない。下記のような例が三〇例中一一例あるのみである。

- (36) (逢い引きする際に案内されたお堂で奇異な体験をして、案内した女に文句を言う)「鬼ノ住ケル所二人ヲ臥セテ。奇異カリケル者カナ」ト云ケレバ(卷二七第一六・新編三八、六一頁)
- (37) (瓜を運ぶ人足達が瓜をくれないので、それを非難する。)翁ノ云ク、「情座ザリケル主達カナ。年老タル者ヲバ、『哀レ』ト云フコソ、吉キ事ナレ。(卷二八第四〇・新編三八、二六九頁)

今昔のカナ感動喚体句全体、あるいは人物名詞型全体とは異なって人物名詞聞き手型の場合には、連体修飾部が動詞句であることがかなり多いのである。三〇例のうちの一九例が動詞が連体修飾している例なのである。

- (38) (陰陽道の魔力の証拠に蛙を殺してみよと言う貴族達に安倍晴明が)「罪造リ給君カナ。然ルニテモ、『試ミ給ハム』ト有レバ」トテ(卷二四第一六・新編三七、二八六頁)
- (39) (言いつけられた用事を果たそうと駆けつけてきた童を見て)茂経此レヲ見テ、「哀、飛ガ如クニ詣来タル童カナ」ト云テ、(卷二八第三〇・新編三八、二三三頁)
- (40) (貝に手を挟まれ動けず海に沈みそうな猿を殺そうと石を持った女に別の女が)

「ユ、シキ態為ル御許カナ。糸惜氣ニ」ト云テ、罰タムト為ル石ヲ奪ヘバ、(卷二九第三五・新編三八、三九八頁)  
 (41) (鬼の居所に迷い込み危うく馬に変えられそうになった僧が鬼の妻に助けられた。その鬼の妻の言葉) 女房  
 可行キ道ヲ教ヘテ、「実ニ奇異キ命ヲ存シ給ヒヌル人カナ。『喜シ』ト思セ」ト云ヘバ(卷三二第一四・新編  
 三八、五二八頁)

これらの例では、「罪造り給君カナ(君罪造りたまふ)」「飛ガ如クニ詣来タル童カナ(この童飛ぶが如くに詣できたる)」「ユ、シキ態為ル御許カナ(御許ゆゆしきわざする)」「実ニ奇異キ命ヲ存シ給ヒヌル人カナ。(この人あさましき命を存したまひぬる)のように、話者が遭遇した聞き手の行為を描写しつつ、聞き手を非難あるいは賛美している。情意評価の意味はあるのだがそれは目立たないものになっていて、話し手が遭遇した事態を描くことに主眼が置かれている。このような用例が人物名詞聞き手型の用例に目立つのである。

『源氏物語』には、そもそも骨子体言が人物名詞であるものは少なかった。さらに、その人物名詞聞き手型の例は二例しかなかった。これとは対照的に『今昔物語集』では、人物名詞型が、形式名詞を骨子体言とするものに次ぐほどの用例数になり、さらに人物名詞聞き手型の例も三〇例以上となった。そして、この人物名詞聞き手型では、話者が遭遇した聞き手の行為を描写することに主眼がある例が目立つのである。遭遇した事態をきっかけに生じた話者の情意や評価を確認する「あはれるわざかな」のようなものと、遭遇した事態を行為と行為者を中心に描いて描く「罪造りたまふ君かな」のようなものとは、同じカナ感動喚体句とは言え、かなり異質の表現となっているのである。



## 四 考察

## 四の一 カナ感動喚体句の骨子体言が聞き手であることについて

感動喚体句の骨子体言が聞き手を示すことがないわけではない。『源氏物語』の「をかしの御髪や」型喚体句には、そのような例が四例ある。二例を示す。

(42) (源氏が玉鬘の顔に灯りを近づけすぎる右近をたしなめて)「今少し光見せむや。あまり心にくし」とのたまへば、右近にかけて少し寄す。「面なの人や」と少し笑ひたまふ。(玉鬘・新編・二二卷一三〇頁)

(43) (玉鬘の評判で人々の心を騒がせようとする源氏を紫の上がたしなめて言う)、「あやしの人の親や。まづ人の心はげまさむことを先におぼすよ。けしからず」とのたまふ。(玉鬘・新編・二二卷一三二頁)

二の一で述べたように、『今昔物語集』では、「をかしの御髪や」型喚体句が衰退していて、「希有ノ事カナ」のようなカナ感動喚体句と「をかしの御髪や」型喚体句が融合したような例がある。

『源氏物語』では、直接聞き手を相手に表現するような場合には、現場性の強い「をかしの御髪や」型喚体句が用いられていたが、『今昔物語集』でこの形式が衰退したことで連動して、カナ感動喚体句でも、このような現場性の強い表現が用いられるようになったとも考えられる。

しかしながら、「をかしの御髪や」喚体句の連体修飾部は、非常に単純で「形容詞の語幹+の」という形で、話者の情意の確認の意味に限定されていた。今昔の(41)「実ニ奇異<sup>アサマシ</sup>キ命ヲ存シ給ヒヌル人カナ」のように動詞句でしかも複雑な内容を表現するものはないのである。したがって、『今昔物語集』で人物名詞型の用例が増え、その骨子体言が聞き手を意味する用例が増えたことをカナ感動喚体句と「をかしの御髪や」型喚体句の混交ということ

だけでは説明できないのである。

#### 四の二 話者の情意の確認から遭遇事態描写へ

『源氏物語』のカナ感動喚体句の多くは、遭遇した事態を契機として話者の内部にわきあがった感情を確認するところに表現の主眼があった。これに対して『今昔物語集』の人物名詞聞き手型では、話者の情意を語ることに主眼があるわけではなく、聞き手が引き起こした事態を描くことに主眼がある。源氏であれば、「あさましきわざかな」のような形容詞連体形を用いたところを、今昔では「あさましきわざする主かな」のような動詞連体形を用いた形になるのである。

注意しておきたいのは、「あさましきわざかな」のような事態全体を表す形式名詞は『源氏物語』の散文では典型的ではあるが、感動喚体句の典型ではないということである。

源氏の和歌に用いられた感動喚体句を見れば、物体名詞を骨子体言とする例は豊富にある。つまり、源氏段階では、和歌には物体名詞を骨子体言とする用例が多く、散文では形式名詞を骨子体言とする例が多いという状況だったのだ。『今昔物語集』ではそこにさらに人物名詞が骨子体言で、人物の行為を描く用例群が登場したということであろう。

#### 四の三 聞き手目当ての表現

聞き手目当ての表現には、「呼び掛け」がある。目の前の相手の注意を喚起するために用いられるものだが、『今昔物語集』では、単純な呼びかけには、助詞ヨが用いられている。

- (44) (生贄を取る猿を懲らしめるために飼犬に自分の身代わりを命ずる)「汝ヨ、我二代レ」ト云ヒ聞セテ、慙

## 二飼ケルニ（卷二六第七・新編三七頁）

この「人物名詞＋ヨ」のタイプは、今昔に一三例あるが、人物名詞に連体修飾句が付いた例はない。

このようなものを呼びかけの典型と考えれば、カナ感動喚体句の人物名詞聞き手型は、呼びかけとはかなり異なり、やはり、話者の感動や詠嘆を表現するものだといえる。

感動表現と呼び掛け表現について、泉子・K・メイナード（二〇〇〇）では、

要するに呼びかけは、単に相手に呼び掛けるといふより、むしろ感情を込めてある人間を主体の感情の対象として把握し、その人に対する感情を表現する機会を作り出すと理解する方が正しい。（泉子・K・メイナード（二〇〇〇）「第9章 呼びかけと感嘆名詞句」一六九頁）

としている。この「ある人間を主体の感情の対象として把握し、その人に対する感情を表現する」という点では、今昔の人物名詞型聞き手目当てのものはまさにそのような表現である。したがって、人物名詞聞き手型は、呼び掛け表現に一步近づいた感動表現であると言える。<sup>（注）</sup>『源氏物語』のカナ感動喚体句にこのタイプはほとんどなくて、『今昔物語集』で増加するということの背後には、以下のようなことも考えられる。

源氏の散文のカナ感動喚体句は、話者自身と事態により湧き上がった感情という二つの要素でなりたっている。遭遇事態への関心は希薄で、そのことが骨子体言が形式名詞であることと関係する。一方、今昔の人物名詞聞き手型では、その遭遇事態を人の行為、とりわけ聞き手の行為として描いている。遭遇事態を「この人がしたのだ」と対人的な観点から表現しているのだ。

源氏の散文のカナ感動喚体句は、自身の感情を確認することが中心であった。そして、和歌ではその感情の契機

となった事態を具体的な事物の在り方として描いていた。院政期の今昔では、それに加えて、他者との交わりという中で自身の感情を捉えているのである。

#### 四の四 「活用語+カナ」との違い

『今昔物語集』の人物名詞聞き手型では、話者の情意を語ることに主眼があるわけではなく、聞き手が引き起こした事態を描くことに主眼がある。遭遇した事態を語るという点では、近藤（二〇二二）で扱った「活用語にカナが下接した用例」の場合と共通である。

「活用語+カナ」は、『源氏物語』の段階では、話者の情意を語ることが主眼の表現であった。

(45) 「あぢきなうもあるかな。戯れにても、もののはじめにこの御事よ。（若紫・新編二〇、二四九頁）

これが『今昔物語集』では、情意を語る部分が目立たない例が増加している。

(46) （翁が蛇に娘をやる約束をしてしまい）「由無キ事ヲモ云テケルカナ」ト思テ（卷一六第一六・新編三六、二〇八頁）

この形だと、普通の平叙文と変わりのないものに変化してしまったことになり、それが衰退の原因である。

しかしながら、カナ感動喚体句の方は衰退しているわけではない。カナ感動喚体句は、主述倒逆した形式が述体とはまったく異質の形式であることが「活用語+カナ」形式よりも長く生き延びる原因であろう。<sup>(注5)</sup> かつまた、それ

は倒逆した主述を持つ感動喚体句という表現形式が述体ともいわゆる一語文とも異なる文形式として存在したことの現れだともいえる。

もつとも、この形式にも衰退の兆しがある。それは、カナ感動喚体句がさらに題目を持ち、名詞述語文に包摂されてしまった例が増加するという傾向である。

『源氏物語』にも、カナ感動喚体句が名詞述語文に包摂された例が一八例存在した。『今昔物語集』では、このような例が三〇例ある。そして、一八例が人物名詞型である。カナの典型は感動喚体句なのだが、その形のまま、名詞述語文に包摂されてしまう例が増加しているのである。

## 五 まとめ

以上、本論では、『源氏物語』のカナ感動喚体句と『今昔物語集』のカナ感動喚体句を比較し、後者に、

- ・人を意味する人物名詞を骨子体言とするものが非常に増加していること。
- ・そのような用例では、人物名詞が聞き手を指す例が目立つこと。
- ・聞き手を指す場合、連体修飾部が情意や評価を語る形容詞ではなくて、聞き手の行為を語る動詞であることが多い。

ということを指摘し、カナ感動喚体句が『源氏物語』の話し手の情意を確認する表現から、遭遇した事態を描く表現に変化し、かつ、『今昔物語集』では、話し手と聞き手の関係を意識した上で用いられた例が増加したのだという見解に至った。

『今昔物語集』のカナ感動喚体句を観察した結果として、もう一つつけ加えることがある。これまでの近藤の論考にも述べたことだが、上代のカモ、中古以後のカナによる感動喚体句は連体修飾部を必須とする。「歴史コーバ

ス」で中古の資料を検索してみても、カナ喚体句が連体修飾部をもたないものは非常にまれである。そういう意味で、上代中古のカモ・カナ喚体句は、一語文の感嘆表現とは一線を画した表現なのである。院政期の『今昔物語集』でも連体修飾部を持たない例は一例のみである。このことから古代語のカモ喚体句・カナ喚体句は、「一語文プラスアルファ」ではなくて、「連体修飾部＋名詞＋終助詞」という形式的な約束のもとにあったと考えるべきであろう。冒頭に喚体句の創始者山田孝雄博士の文を引用したが、ことカモ・カナ感動喚体句に限っては「直感的・一元性の発表」ではなく、「三元性」の表現であったことになる。この点について川端（一九六三）では「喚体は」実質的にネクサス（述体）との根本的なある共通性を言っていることになる。即ち、喚体における「美しき花」はモノでなくコトに事物ではなく事態に対応しているのである。（三三頁）としている。カナ感動喚体句は、意味づけとして「事態に対応する」だけではなく、現実の句の形式として、倒逆した主述があらねばならなかったのである。今後は川端（一九六三）のいう「述体との根本的な共通性」を踏まえた上でカナ感動喚体句の、述体とも名詞一語の感動文とも異なる独自性を追求すべきであろう。

注

注1 今昔の「その他」三例というのは修飾部が不明なものと、修飾部が無い例である。

注2 新編の口語訳は「長い年月たったので、美しい川原に松がはえてしまった。こうも荒れてしまうと、寝屋の上で子の日の遊びができるというものだ」とある。「しっぺき」とあるので遭遇した事態とは言えない例である。

注3 富岡（2014）では、「体言カナ」が「聞き手あり」の場合と「聞き手なし」の場合とで例数が拮抗している（p.3）としている。

注4 笹井香（二〇一七）の提唱する「レッテル貼り文」を思わせるものもある。

注5 『今昔物語集』には一例連体修飾部がない例がある。「公助ハ白者カナ。然被打テ居ヨ」ト咲ケリ。(巻十九 第二十六・新編三六、五四三頁)。

# 参考文献

- 浅見徹(一九六九)「十三かな―終助詞〈古典語〉」松村明編『現代語古典語助詞助動詞詳説』學燈社 一九六九年
- 石神照雄(二〇一〇)「山田文法の文の論理と述体、喚体」斎藤倫明・大木一夫編『山田文法の現代的意義』ひつじ書房二〇一〇年二月二四日
- 石神照雄(二〇一六)「日本語構文の論理」『信州大学人文科学論集』三集 二〇一六年 三月一五日
- 川端善明(一九六三)「喚体と述体―係助詞と助動詞とその層」『女子大国文』一五号 一九六三 一二月
- 小柳智一(二〇〇三)「名詞の論―名詞の本質―」國學院大學国語研究会『国語研究』(六七) 一一―一四 二〇〇三―一二
- 近藤要司(一九九七)「『源氏物語』の助詞カナについて」『金蘭短期大学研究誌』二八 一九九七年二月(近藤要司(二〇一九)『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院 第二章第二章に再録)
- 近藤要司(二〇〇九)「文末カモの詠嘆用法について」神戸親和女子大学『親和国文』第三九 二〇〇四年二月(近藤要司(二〇一九)『古代語の疑問表現と感動表現の研究』第一部第一章に再録)
- 近藤要司(二〇一三)「をかしの御髪や」型感動喚体句について」神戸親和女子大学『親和国文』四七号 二〇一三年三月(近藤要司(二〇一九)『古代語の疑問表現と感動表現の研究』第二章第二章に再録)
- 近藤要司(二〇二二)「活用語カナ」型詠嘆表現の衰退について」神戸親和女子大学『言語文化研究』二〇二二

年三月三十一日

笹井香（二〇一七）「レットテル貼り文という文」『日本語の研究』第一三卷四号 二〇一七年一〇月

泉子・K・メイナード（二〇〇〇）「第九章 呼びかけと感嘆名詞句」『情意の言語学 「場交渉論」と日本語表現のパトス』くろしお出版 二〇〇〇年三月二三日

富岡宏太（二〇一四）「中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ」『日本語の研究』一〇卷四号 二〇一四年一〇月

西田隆政（二〇一二）「詠嘆」の終助詞「かな」再考―「源氏物語」を資料として―『武蔵野文学』六〇二〇一二年二月一〇日

仁科明（二〇〇八）「人と物と流れる時と―喚体的名詞一語文をめぐって―」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明『ことばのダイナミズム』くろしお出版 二〇〇八年九月二三日

（神戸親和女子大学教授）